

ジャガイモと映画 (21)

<イモ大好き (1)>

Web ジャガイモ博物館館長

あさ ま かず お
浅間 和夫

75. 『ローマの休日』

(原題: Roman Holiday)

1953年、アメリカ映画。監督: ウィリアム・ワイラー。

ヨーロッパにおける古い歴史と伝統を持つ某国の王女アン（オードリー・ヘプバーン）は、ローマ滞在中に、過密なスケジュールや自由のない生活への不満によるストレス発散のため、密かに宿である城を抜け出す。直前に主治医から打たれていた鎮静剤のせいで、路傍のベンチでうとうとする。アメリカ人新聞記者のジョー・ブラッドレー（グレゴリー・ペック）が見かねて介抱してやる。王女はジョーのアパートまでついて来て、眠くて寝てしまう。

翌日、彼女の素性に気づいたジョーは、“王女の秘密のローマ体験”という大スクープをものにしようと、職業を偽り、友人のカメラマンの助けを得て、王女を連れ歩くことに成功する。

アンは、美容院で髪の毛を短くし、スペイン広場でジェラートを食べる。その後なんと王女が運転する二輪車に二人乗りしてローマ市内を廻り、“真実の口”を訪れたり…自由と休日を生き活きと満喫するアン王女とジョーの仲は、しだいに近づいていく。その翌日、宮殿ではアン王女の記者会見が開かれ、撮影した写真がすべて入った



写真1 ジャガイモ大好きオードリー

封筒を、王女にそっと渡す。最後にローマの感想を聞かれ、王女から「ローマは永遠に忘れ得ぬ街となるでしょう」と言う言葉が付け加えられる。

筆者からみると、一番ジャガイモが出てきて欲しい映画であるが、残念ながら見つからない。オードリーの母親はオランダ人で、父親はアイルランド人のため、「彼女にとってジャガイモはとても重要なものでした」、と息子であるルカ・ドッティが、自著『家でのオードリー: 母の台所の思い出 (Audrey at Home: Memories of My Mother's Kitchen)』を出版した際、母との暮らしを振り返ったインタビューの中で語っている。

近年日本でも、生活の中で水分を十分摂取するよう言われるようになったが、彼女は“水分摂取は美容と健康に欠かせない”

として早くから実践していた。ベジタリアンではないが、肉は少なめで、野菜・果物の摂取を多くし、その鮮度にもこだわり、地元で採れた新鮮な旬の野菜ばかり食べていたという。そんな影響を受けてか、息子のルカも夏場はヴィシソワーズ（ジャガイモの冷製スープ）が大好きであった。

76.『逃げるは恥だが役に立つ』

2016年、邦画ドラマ。監督・ディレクター：金子文紀、土井裕泰、石井康晴。

TBS放映のドラマである。原作は海野つなみ著の講談社『Kiss』に連載した同名の漫画であり、全11話でできている。

第1話プロの独身男と秘密の契約結婚

森山みくり（新垣結衣）は、院卒であるが内定0で、彼氏なし。派遣社員になるものの派遣切りにあい、目下求職中となり、「誰からも必要とされないつらさ」を日々感じている。そんな娘を見かねた父親の計らいにより独身の会社員・津崎（星野源）の家事代行として働き始めることになる。かゆいところに手が届く働きぶりにより津崎の信頼を得る。しかし、あることからその仕事も失いそうになる。

会話中に、なんと「就職という意味で結婚するのはどうですか?」と提案してしまう。かくて真面目で純情な津崎と契約結婚することになる。周囲には秘密にして、夫が雇用主で妻が従業員という関係が開始される。合意内容は書面に残るから、「言った・言わない」と言う夫婦喧嘩は回避できるであろうが、そんな偽装結婚か事実婚か判らぬ生活が続けられることができるか。秘密の雇用関係に挙式や結婚披露宴はどうなるのか…。



写真2 ジャガイモ大好き新垣結衣（左）

この星野源と新垣結衣が、2021年5月本当に結婚することを発表して話題になった。（写真2は話題のふたり）筆者はそれよりも2020年9月25日に放送されたTBS系の『ぴったんこカン・カン』にコロッケ好きで知られる新垣結衣らがゲスト出演し、古田新太の問い答えて彼女の“好きな野菜ランキングTOP5”を発表したことに興味を持った。その第5位：タケノコ、第4位：ダイコン、第3位：カリフラワー、第2位：トウモロコシ。そして第1位がなんとジャガイモ。お気に入りの食べ方については「おつまみとかでレンジでチンしてバター乗っけて醤油かけたり、ビール飲んだりして」。ほかにも「パスタの明太子ソースとかかけて食べたり」と明かし、古田や藤井隆から深い共感を得ていた。

77.『フジコ・ヘミングの時間』

2018年、邦画。監督：小松^{こまつ}荘^{そう}一^{いち}良^{りょう}。

世界的なピアニストのフジコ・ヘミングは、日本人ピアニストで美人の母の大月^と投^と網^わ子^こと若いスウェーデン人で画家と建築家の父を両親としてベルリンに生まれる。日本にきたものの、太平洋戦争が始まったた

め父は祖国へ送られ、東京で母の手ひとつでの苦しい生活、5歳から母の手ほどきによる厳しいピアノレッスン、ハーフへの差別、28歳からの貧しい留學生活など波瀾万丈を経験する。

ベルリン音楽学校を優秀な成績で卒業。その後長年にわたりヨーロッパに住み、演奏家としてのキャリアを積む中、レナード・バーンスタインほか世界的音楽家からの支持を得る。しかし『一流の証』となるはずのリサイタル直前に風邪をこじらせ、聴力を失うというアクシデントに見舞われる。失意の中、ストックホルムに移住。耳の治療の傍ら、音楽学校の教師の資格を取得し、以後はピアノ教師をしながら、欧州各地でコンサート活動が続ける。

1999年のリサイタルとNHKのドキュメント番組が大反響を呼び、デビューCD『奇蹟のカンパネラ』をリリース。クラシック界異例の大ヒットを記録、遅咲きながらモスクワ・フィル、ロイヤル・フィルなど世界各地の著名オーケストラと共演を果たし、ヨーロッパをはじめ、北米、南米、ロシアなど世界中からリサイタルのオファーが絶えない。公演活動で多忙を極める中、猫や犬をはじめ動物愛護への関心も深く、長年チャリティー活動も続けている。情感に満ちたダイナミックな演奏は人々から“魂のピアニスト”と呼ばれている。本作は、世界を巡るフジコを2年にわたって撮影した初のドキュメンタリー映画である。



写真3 ジャガイモ大好きフジコ・ヘミング

自宅でのインタビュー収録や2018年に暮らしの手帖社から出された『フジコ・ヘミング14歳の夏休み絵日記』からジャガイモ絡みを拾って紹介したい。

当時の少女はいつもお腹をすかせて、食べることしか考えていなかった。母がお中元でもらったジャガイモを摺り下ろしてメリケン粉と一緒に焼いてパンケーキをつくったり、弟とふたりで茹でたりした。カタクリ粉（多分少量の水で溶かしてから熱湯を注ぎ、のり状にしたもの）とおかきのお三時を頂いたことも。戦後になっても季節になると昼も夜も自宅の庭でつくったジャガイモ、（ニホン）カボチャ、トウモロコシが食卓にのった。かくて（寒冷地で作るセイヨウカボチャとは異なり、高温多湿で育ち水っぽい）ニホンカボチャは嫌いとなったが、ジャガイモは今も大好きであり、今でも味噌汁の具には必ず一個入れるほどである。自力で収穫したジャガイモを使い、“ザブトン焼き”と呼んだ料理を考案したこともあったとか。